

H-3 神話の系譜

943. ジャワ島の創出

「最高神ブトロ・グル (Betara Guru) (バタラ・グルともいう)」は天地創造の任務を帯び、太陽と月、多くの神々も造った。その頃、ジャワ島は位置が定まっておらずグラグラと海の上で揺れていた。それを固定するためにブトロ・グルは神々に命じてインドから山を運んできてジャワ島に^{おもし}重石として乗せるように命じた。

神々は山の頂を切り取り、肩にかついでジャワへ運んだが、途中で山をジャワ島の西側に落とし、ジャムルディ山と名づけた。そのため島は西に傾いた。

そこで神々は再び山をかついで東へ移動させたが、その途中で山の一部分が欠け落ちていくつもの山ができた。それがムラピ山(→125)であり、ラウ山(→132)である。ジャワ島の東西に連なる山々は山脈というよりは火山の串団子のようなものである。豊穡なる大地の乳房の陳列という形容もある。

ヒンドゥー教の宇宙観では世界の中心にメール山がそびえている。日本仏教では^{しゅみせん}須弥山として妙高山である。ジャワ島のメール山はスメル山(→149)は東ジャワのプロモ山の奥に鎮座するジャワ島の最高峰(標高3690m)である。

最高神はジャワ島の地に一組の男女を創造する。かれらの子孫は数をふやすが、衣服を着ることも、住居を建てることも、道具を使うことも、言葉さえ知らなかった。そこで最高神は神々に命じてジャワ島の地に下りて人間たちに文明の知識を授けた。

ブトロ・グルはヒンドゥー教の最高神シバ神である。ワヤン人形では腕が4本、見誤ることはない姿で表される。厳かに登場しダラン(→874)の語りも厳粛である。しかしワヤン(→904)のマハーバラタ(→946)で演じられるブトロ・グルは人間同士を争わせて面白半分に観戦している。気まぐれであり、感情のゆれは人間臭すぎる。

イスラム教の進出によりアッラーが唯一の最高神となった。イスラム以前に存在した諸々の神はアッラーの前では道化のような存在におとしめられた。松本亮(→364)説によればワヤンを広めたイスラム先導者の意図がブトロ・グル神を変身させた。

ジャワ人の起源としてジャワ人に伝えられているのはアジサカ (Adjisaka) である。アジサカはアルジュノ(→948)5世の孫でハスティナ神国の大臣である。彼のジャワ到着をもってジャワの歴史が始まった。インドネシア人は人種の系統からはモンゴル系(→567)である。しかし文化の^{ちゅうたい}紐帯をインド文明、ヒンドゥー教に求めている。

15世紀以降、宮廷とは関係のない地方の僧侶によって書かれたらしいタントウ・パングラランという創造神話がある。そこにはインドという制約から離れたジャワを舞台としたジャワ人の自画像が描かれている。ジャワ文化が独立したといえる。

944. アレキサンダー大王

『マレー年代記 (Sejarah Melayu)』によれば、インドへ遠征したアレキサンダー大王の子孫はスマトラ島のムシ河上流の聖なるデンポ山(→101)に降臨してスリウィジャヤ王朝(→255)が^{かいてんく}開闢した。別の記述によれば降臨

したのはパレンバン(→102)のスグンタン(Seguntang)の丘ともいう。17世紀マレー半島に栄えたマラッカ王国はスリウィジャヤ王朝の皇統を引き継ぐ。従ってマラッカ王国の始祖はアレキサンダー大王であると伝えている。マレー年代記はマラッカ王国歴代の王の系譜を綴ったものであるが、前半は神秘的な内容の伝説が主であり、正確な史実というよりも神話というべきものである。ジャウィ文字(→960)というアラビア文字を使用してマレー語で記されており、古典ムラユ(マレー)文学の^{はくび}白眉として評価が高い。

「タンボ(tambo)」という歴史書に記されたミンナカバウ人(→609)の伝説によればアレキサンダー大王の乗る東征の船は岩礁で難破する。難破した岩とはパダン高原のマラピ山(→098)とされている。

大王には3人の息子がおり、長男マハラジャ・アリフはトルコの、次男マハラジャ・ジイパンは中国・日本の、三男マハラジャ・ディラジャはミンナカバウ人の王になった。ミンナカバウでは日本人はアレキサンダー大王につながる親類筋として特別の親愛の情を示される、ということである。

史実として東南アジアとアレキサンダー大王の接点はないにもかかわらず、東南アジアにアレキサンダー伝説の生まれたのはイスラム教とともにもたらされたものである。

アラブ世界ではアレキサンダー大王は世界征服の戦士として崇拜され、伝説化された“異能の人”であった。大王は西暦BC334年にアジアへ向った。これという戦いには臆せず臨んだが、その他は敵から服従を申し出てきた。

大王のアジア東征は破壊による征服ではない。武人としてのみならず政治手腕に勝っていたので、結果としてヘレニズム文化がアジアに広まった。

イスラム教のアジア伝導はアレキサンダー大王の東征になぞらえている。「コーランか剣」と言いつつコーランを優先させた。武力でなく文化力による征服という点でアレキサンダー大王はイスラムの先駆者と見なされている。大王の東征はインドまでであったが、イスラムの東征はインドネシア、フィリピンのミンダナオ島にまで到達した。

イスラム世界の支配者のアレキサンダーへのこだわりは名前にもある。マラッカ王国の2代目の王の名前はスルタン・イスカンダール・シャー(Sultan Iskandar Syah)であり、イスカンダールとはアレキサンダーのアラビア語読み¹である。

アチェ王国(→257)はスルタン・イスカンダール・ムダ(Sultan Iskandar Muda 在位 1607-36)の治世に黄金時代を迎えた。スマトラ島のその他のスルタン王国の歴史においてもイスカンダールの名の王はしばしば現れる。

945. 「ラーマーヤナ」

『ラーマーヤナ(Ramayana)』はインドの古代叙事詩である。「ラーマー(Rama)」という英雄の波乱万丈の活躍を描く7篇2万4千頌(4万8千行)からなる膨大な韻文である。ラーマーはジャワではロモといわれる。紀元2世紀頃ヴァールミーキという詩人によって現在のような形にまとめられたという。

その大要はラーマー王子は即位の前日、異母の姦計によりアヨディヤ国を追放され、妻のシンタ(Sinta)姫と弟のラクスマナとともに森で過ごす。シンタ姫の美しさに目を奪われた魔王ラワナ(Rahwana ジャワ語ではラ

¹ アレキサンダー(Alexander)の語頭の“al”はアラビア語では冠詞である。

ウォノという)は家来にシンタ姫を誘拐するように命じる。

魔王の家来が黄金の鹿に変身してシンタ姫を誘惑するシーンは舞踏での見せ場である。毘に嵌ったシンタ姫を誘拐して魔王ラワナはランカ王国(スリランカ島)に戻る。シンタ姫を探すラーマー王子は神鳥のガルーダ(後述)からランカ島にシンタがいることを教えられる。味方になった神猿ハヌマン(後述)に指輪を託して使いに送る。

飛行してランカ島に来たハヌマンはシンタ姫に指輪を渡し、代りにシンタ姫から髪飾りを受け取る。ついでに魔王の手下を相手に大暴れするのも演出では欠かせないシーンである。やがてラーマー王子側の軍団が到着してランカ国と戦争になりラーマー王子側が勝ち、シンタ姫と再会できてハッピーエンドというのが大筋である。

魔王ラワナはラクササ(Raksasa)の総大将である。ラクササは何かの因果で人になれず悪行を行うことが運命づけられている。巨人で異形の容貌には牙のような鬼歯が特徴である。まさに日本でいう“鬼”である。松本亮著『ラーマーヤナの夕映え』によれば悪の権化として運命付けられた魔王ラワナの所業こそラーマーヤナの主題である。ラワナに挑む地上の名将の一人がラーマー王子である。

インドネシアでは10～11世紀頃ヨーギシュヴァラによってカウィ語(→909)に訳されたものはラーマーヤナ・カカウインとして知られる。ロンタル(→045)に刻まれた文字の読める人は限られているが、民衆は影絵芝居やワヤン・ウオンという舞踊劇を通してラーマーヤナの物語を知っている。観光で有名なバリのケチャ・ダンスもラーマーヤナのパフォーマンスである。プランバナン遺跡(→128)ではラーマーヤナの野外バレエが上演される。

ラーマーヤナの物語はインド文化とともに東南アジアの各地に伝えられた。各国ではなんらかの修正があり、エピソードが付け加わり自国文化の血肉になっている。タイ国王はラーマの子孫であるとして代々「ラーマ何世」と名乗っている。ちなみに現在のタイ国王はラーマ9世である。

インドネシア政府は1972年に第1回アジア・ラーマーヤナ・フェスティバルをプランバナンで開催した。インド、ビルマ、スリランカ、タイ、マレーシアのインド文化圏の国が参加して盛り上がった。

⇒915.ケチャ/集団舞踏

946. 「マハーバーラタ」

インドのどこかにアスティノという王国があり善政の下で繁栄していた。王の直系の長子ダストロストは盲目で政治が行えないため、弟のパンダワ(パンドゥともいう)が王位についた。パンダワ王の不慮の死のためダストロストは王位を代行し国を先王パンダワの息子と自分の息子に分割して両族に治めさせることにした。

しかしダストロストの息子達は父の裁定に異議を唱えた。『マハバラタ(Mahabharata)』(インドの原つづりはマハーバーラタ)はパンダワ王の5王子の《パンダワ(Pandawa)一族》とダストロストの王子百人の《コラワ(Korawa)一族》との骨肉の従兄弟の間の王位継承をめぐる争いである。コラワ側のパンダワ側への近親憎悪は出生の因縁にかかわる女性の怨念が絡んでいる。

パンダワの人望を嫉んだコラワ側は放火して焼き殺そうとするが、難を逃れたパンダワ一族はアマルト国をたてる。しかしコラワはなおもパンダワを追い立てる。パンダワ総領のユディスティロ(Yudistira)はコラワ側の策略のサイコロ博打には嵌められ、所有物を順番に取られて遂には王国をかける。負けるや、兄弟を一人づつ

賭けて負け、最後に妻をも賭けて負ける。親類が仲に入り妻と兄弟は戻してもらう。妻ドラワティは人前で裸にされ鬘まげを崩す屈辱にコラワの死体の血でないと髪を結わないと呪う。パンダワ族はアマルト王国から“ふんどし”一つで放逐される。

コラワ側の長兄ドゥルユドノ(Duryudana)は悪の権化とされる。次兄ドゥルソソノ(Dursasana)は粗暴の武将である。あとの98人はそれほど活躍するわけではない。

これに対してパンダワ5王子の長兄ユディスティロは白い血をもつ徹底した非戦論者である。清廉潔白、公平無私、法を守り、瞑想が武器である。すべての装飾品を剥ぎ取り端正な黒い顔で表される。

次兄プロトセノ(Bratasena)は通称ビマ(Bima)の名で知られる。剛勇であり一族を率いる。三男アルジュナ(次々項)は武芸に優れハンサムであるから女にもてる。天界放浪の女性をめぐるエピソードが多い。双生児の弟ナクロとサデウォの2人は格別の超能力も持ち合わせないためあまり出番がない。

パンダワ側は食べるものにもこと欠きながら12年間山中を放浪し誰からも身分を見破られないように身を隠して過ごすという刑罰に従った後、ようやく戻ってくる。クレスノ(Kresna)が使者になり王国の返還を要求するもコラワ側は応じない。

両族の確執はクルカセトロ(Kurukshetra)の曠野に拡げられる18日間の大戦争となりバラタユダといわれる。両陣営に長老や参謀がつき超能力の威力を発揮する。初めはコラワ側が優勢であるが、最終的にはパンダワ側が勝つ。

正義が邪悪に勝つも空しさが残る。マハーバーラタは豪快な武勇伝でもない、勧善懲悪でもない。神の筋書きどおり運ばれ、人間とは所詮は定められた宿命から逃れることはできない。人間界の闘争は宇宙支配の神によって観戦されている。

947. マハバラタの上演

インドの《マハーバーラタ》はインドネシアでは《マハバラタ》といわれる。マハバラタには神話、伝説、訓話、説話が挿入されており、その分量はホメロスのイリアスとオディッセイアを束ねたものの8倍、ラーマーヤナの4倍になるという。

マハバラタ神話がインドネシア文化の血となり肉となっているのはワヤンと言われる影絵芝居(→904)を通してである。夜を通して上演されるが、長い物語であるので一夜で上演される演目をラコン(lakon)という。マハバラタのラコンは約200である。

これらすべてのラコンもバラタユダ(Bharatayudha)というマハバラタの最後の大戦争にいたる伏線である。エピソードが加わりすぎた日本の忠臣蔵の芝居が数段に分けて演じられるようなものである。

ワヤンの上演のパターンはまず国の紹介があり、主要人物が登場し問題が提起される。小競合いがある。



プシンデン

夜半頃にゴロゴロという場面展開があり、物語の本筋とは関係ないスマルー族(→906)が登場する。スマルはジャワが産み出したアルジュナ(次項)の従者であり、哲学的なセリフ(カウイ語)を判りやすい言葉(ジャワ俗語)で面白くいうピエロ的役割を果たす。

プシンデンという女性歌手の独唱も間奏曲のような形で挿入される。場面の切り替えにはグヌンガン(→905)という山を象徴するスペード型

の影絵が使用される。その後は主要人物が一举に登場し大団円に向かう頃、雄鳥の声が聞こえ東の空は白む。

マハーバーラタは主要人物の基本的性格、物語の骨子だけが決まっているだけでワヤンのストーリーはジャワで脚色されたものである。ジャワとバリでは異なる。同じジャワでもジョグジャカルタ(→120)とスラカルタ(→130)で差異がある。表現方法ではダラン(→874)各々に持ち味がある。

怨念の両族の最後の決戦パラダユダはマハバラタの大団円である。主要な戦闘はワヤンでは一騎打ちの決戦で表される。両軍の将は次々と倒れ、最後にカルナとアルジュナの両エースの一騎打ちである。カルナはパンダワ5兄弟の異父兄になる。カルナは兄弟への肉親愛とコワラから受けた恩義の板挟みになるが、義のために異父弟のアルジュナと戦う。激戦はアルジュナが勝ち、カルナは破れる。

クル・カセトロの曠野は双方の兵士、軍馬、軍象の屍骸の血で塗られる。両軍とも並居る英雄の凄絶の死で終わる。英雄の死を悼む恐れからよほどのことがない限り上演されない。仮に上演される際には念入りに供物が供えられ、香が焚かれる。特に9月30日事件直後は大量殺人への^{おの}慄きから、しばらくはパラダユダが演じられることはなかった。

11のラコンからなるパラタユダの書はクディリ王朝のジョヨボヨ王(→299)の意図により詩人によって編まれたと伝えられる。分裂したクディリ王朝が再統合される際の血族の犠牲におののいた鎮魂の意図が込められているという。

⇒905.ワヤンの上演

948. マハバラタの神々

マハバラタに登場する神々の中のパンダワ兄弟は長男ユディスティラ、次男ビマ、三男アルジュナ、ナクロ、サデウオである。登場人物の性格はパターン化されている。

長男ユディスティラ王の武器はカリモンドという呪文である。彼は博打にのめり込めば理性的判断を失うという人間的弱点を持つ。マハバラタの最後はパンダワ一族の天国への旅である。白い犬とともに天国の扉に着いたユディスティラは犬も残して一人だけ入るように言われたが、ユディスティラは弟達、妻、忠犬と一緒にないといやだと断った。



ビマ

次男ビマ(別名ウルクドロまたはプロトセノ)は最も勇敢である。真正直な偉丈夫である。

インドネシア人に最も人気あるスーパーヒーローは三男のアルジュナ(Arjuna)神である。ジャワ語読みではアルジュノである。アルジュナは気品のある美男子の典型で女性にもてる。契った女は無数で、従って子供も数え切れない。



アルジュナ

マハバラタ本文の『森の書』のエピソードを発展させたジャワの創作に『アルジュナ・ウィワーハ物語(→906)』がある。原題は「アルジュナの饗宴(結婚)」の意味であり、ワヤンではミントゴロとして著名な36詩篇のカカウイン(→968)とい

う韻文からなる。

同物語の作者ムプ・カンワはアイルランガ王(→333)時代の宮廷詩人である。失った王国再興のための修行の旅はアイルランガ王自身の姿の反映であろう。物語の要旨はインドラキイラ山の聖者ドライパーヤナに会い、天の兵器を授かるためアルジュナは二人の従者とともにヒマラヤ山中に入る。断食や懺悔によって神々の世界に近づく。7人の天女が寄りをすぐってアルジュナを誘惑するが、天女の手練手管にアルジュナはいささかも動じなかった。この場面は時としてエロチックに演じられる。

天界の助けによりアルジュナは悪魔王ニワタカワチャを滅ぼす。アルジュナ・ウィワーハはアルジュナの単なる冒険談ではない。アルジュナの巡礼の旅は人生の真理への希求を象徴している。

クレスノ(Kresuna)は自ら戦闘に参加はしないが機知に富み、パンダワ兄弟側の参謀である。パラダユダを神が定めたシナリオ通りに演出する。骨肉の争いに厭戦的であるパンダワ側の総帥ユディスティラを叱咤激励してコラワ側の有利な状況において知謀でもってパンダワ側に勝利をもたらす。

コラワ側にはバラモンのドゥルノ、一族の長老ビスモなど魅力ある人物がいる。コラワが悪者であり滅びることは分かっているが打算を越えた生き方である。

太陽神の子カルナ(Karna)は実はパンダワ兄弟の異父兄である。母クンティが結婚前に太陽神との間にもうけた子供である。産み落とされるや川に流される。姿、形はアルジュナにそっくりである。コラワから受けた恩義のためパンダワと敵対しアルジュナと戦いに敗れる。スカルノ大統領の名前はカルナにちなむ。

949. ロロ・キドゥル女神



ニヤイ・ロロ・キドゥル²はインド洋に住む“南海の女王”である。ジャワ島西部からバリ島のインド洋側では女神にちなむ伝説が伝わっている。

南海の女王に対する尊敬の念を込めたフルネームはカンジェン・ラトゥ・キドゥル・クンチョノサリ(Kanjeng Ratu Kidul Kencana Sari)である。カンジェンはもともと中国語の「官人」であり、高位の人物に対する敬称で、ラトゥは「女王」、クンチョノサリは「黄金の華」という意味がある。

各地に伝わる諸々の伝説の最大公約数的にまとめれば彼女はもともとパジャジャラン王国(→260)の王女であった。父王の薦める結婚を断ったことから王の逆鱗に触れ、呪いをかけられ海の中の宮殿に閉じ込められて海下の女王となる。

ジャワ人の意識では《山＝聖》に対して《海＝賤》である。彼女は魔の世界である海を取り仕切る女神となった。女性特有の気まぐれであり怒りっぽい性格のため、触らぬ神にたたりなしとばかり敬遠されて崇められてきた。

女神は緑の髪で貝や海草を身にまとい永遠に歳をとることはない。魅惑な姿で若者を海に引き寄せるとい

² ニヤイ・ロロ・キドゥルの綴りは ①Nyai Roro Kidul と②Nyai Loro Kidul があり、どちらが正しいのか分からない。インターネット検索数では①の方が優勢である。〈編者注〉Nyai Roro Kidul は Kanjeng Ratu Kidul の部下であるという説もある。

う。ギリシア神話のサイレンのように美しい女神である。インド洋で遊泳し波にのまれた溺死者はロロ・キドゥルに拉致されたことになっている。

マタラム王朝の創始者のスノパティ(→250)は女神とは特別な関係にある。スノパティは海底で女神と3日過ごし、その庇護を受けることができるようになったという。このマタラム王朝の建国神話の背景を考えてみたい。

開闢以来ジャワの王統は連綿と続いてきた。王朝が代っても前の王の女婿であるという女系などにより前王朝との血統が保たれている。この点、マタラム王朝の場合は先の王朝との血縁は無いに等しい。そこでマタラム王家がジャワに冠たることを示すには血縁に代る権威付けが必要であった。それがロロ・キドゥルとの交情であろう。日本の皇室の起源における天照大神の位置づけに対応させることができる。

ロロ・キドゥル女神はスノパティの妻であったが精神世界の意味であり普通の意味の夫婦ではない。女神を制御できたのは異能の人のスノパティだけであり、常人にとっては恐ろしい神³であった。

スノパティの子孫だけが女神に教えを乞う資格がある。パラントゥリティスというインド洋に面した海岸で女神への儀式が忠実に行われている。



ブラブハンラトゥのニヤイロロキドゥル

インド洋側のリゾート地ブラブハン・ラトゥ(→111)にある海を見下ろす近代ホテルでは彼女への敬意のため専用の部屋が常時確保してある。女神を軽んじたバリ・ビーチ・ホテル(→174)では火災が発生した。

百瀬直也氏が女神ゆかりの地を訪ね、信じられないような話を収集されているHPを見ていると日本人にもロロ・キドゥル信者がいることが分かる。

⇒124.パラントゥリティス海岸

950. ロロ・ジョングラン

ジョグジャカルタの東方 15km のプランバナナ (Prambanan) 村に古代マタラム王朝時代のヒンドゥー遺跡(→128)がある。プランバナナ遺跡の 47m の主塔のあるシヴァ (Shiva) 神を奉る堂はロロ・ジョングラン (Loro Jonggrang) といわれる。垂直にそびえる姿は装飾過多であるにもかかわらず清楚な感じがすることから“処女の寺院”ともいわれる。

北面にあるヒンドゥー主神シヴァの妻である女神ドゥルガー (Durga) の巨像がなまめかしい。女神ドゥルガーの像に関連してロロ・ジョングランの次のような伝説⁴がある。

ロロ・ジョングランはサイレンドラ国(→243)のラトゥ・ボコ王の娘であった。世にも美しい王女に求婚者は相継ぐが彼女は応じない。その理由は奴隷と道ならぬ恋におちていたからである。

あるとき金も権力もあるバンドゥン・ボンドウオソ (Bandung Bondowoso) という巨大な青年が王女に結婚を申し込む。進退極まった王女は拒絶の返事の代わりに無理難題の条件を突きつける。一晩で壮麗な尖塔を持つ千のチャンディ (寺院) を作り、各チャンディには彫像が収められこと、ただし期限は朝の一番鶏の鳴くまでである。

³ 最近のムラピ山の爆発、ジャワ地震の原因はロロ・キドゥルにからめた話をジャワ人は好んでいる。

⁴ ロロ・ジョングラン伝説には色々なバリエーションがある。

この要求に青年は精霊を集めて神技で取り掛かる。完成しそうになったのを見て王女は鶏に声を挙げさせ、料理人に命じて朝食の米を搗く音を一齐にたてさせた。精霊は朝の光を畏れて隠れ、工事は未完成になる。

青年は王女の策略であることを見抜き、魔法をかけて美しい肢体を石に変えて千個目のチャンディに閉じ込めた。これがドゥルガー石像である。ロロ・ジョングラン寺院の北にあるチャンディ・セウの遺跡はバンドウン・ボンドウォソの造った 999 のチャンディであるとしてチャンディ・セウ(千の寺院という意味)と名づけられた。

西部ジャワのタンクバン・プラウ山のその名の「ひっくり返った船」という山の名の由来についても同じようなサンクリアン伝説(→109)が伝えられている。東部ジャワのジャワ人のロロ・ジョングラン伝説と西部ジャワのスンダ人のサンクリアン伝説は繋がっている。

史実から見ると中部ジャワにサイレンドラ国があり、仏教を奉じておりボロブドゥール寺院(→126)を建設した。少し遅れてヒンドゥー教を奉じるマタラム王国(→244)が勢力を伸ばして、やがてサイレンドラ国を併合した。ロロ・ジョングラン伝説はヒンドゥー教による仏教の封じ込めを意味するという解釈がある。

その後、ジャワ島はイスラム化し、仏教もヒンドゥー教も忘却の彼方にある。それにもかかわらずプランバナンの遺跡のうちロロ・ジョングラン寺院だけが破壊されずに保存されてきたのは宗教と関係のない神話の故であろう。

プランバナンの主建物は抜本的修復を行うためにユネスコの主導する国際協力によって解体修理された。さらにプランバナンの遺跡77ヶ所を「国立歴史公園」にするべく整備中である。

⇒128.プランバナンの遺跡

951. ガルーダ/神鷹

ガルーダ(Garuda)はインドネシアで馴染みのある霊鳥である。毒蛇をも飲み込む孔雀の神格化ともいわれる。ガルーダはワヤン(→904)の人気あるキャラクターであり、バティック(→927)のデザインにも取り入れられてきた。インドネシアは独立に際してガルーダを国章として採用した。両翼は 17 枚、尾羽は 8 枚、首羽は 45 枚で、独立記念日 1945 年 8 月 17 日を表している。



ガルーダ

インドネシア国のナショナル・フラッグのガルーダ航空(→850)は世界に羽ばたいており、ガルーダはインドネシアのシンボルである。このようにガルーダはインドネシアのシンボルとなっているが、もともとはインド神話の神鳥であり、ヒンドゥー文化圏が共有している。インドネシア人のイスラム改宗後も生き残るガルーダ信仰は重層信仰の表われである。ちなみにガルーダはタイでは王室のシンボルである。タイでのガルーダを見かける頻度はインドネシアと変わらない。

日本に伝えられた仏教にもヒンドゥー教の多数の神様が取り込まれている。その中にはガルーダもある。興福寺には有名な阿修羅像と一緒にある異教異形の集団である。人間の像であるが、顔にある嘴が鳥であることを表している。

ただし日本のガルーダはラクダの背によるシルクロード経由のもので、容姿は人体で顔に鳥の面影は残っている。ちなみに日本の“天狗”の起源は迦楼羅といわれる。飛行可能な超能力はガルーダの影響を受けている。

ヒンドゥー教の3主神は役割と乗り物が決まっている。“創造の神”であるブラフマ神は白鳥に乗る。“破壊

の神”であるシヴァ神は牡牛(ルムブ・アンディン)に乗る。三つ又の鉾のトリシュラが武器である。シヴァ神が踊る時にはすべてが破壊される。最後の踊りはハルマゲドンを招く。

“保護神”であるウイスヌ(Wisunu)神の乗物はガルーダである。武器はチャクラという空飛ぶ円盤である。神としては人間界の事件に介入できないので生まれ変わりとして10の化身を持ち、世界を守っている。

ガルーダは鷲の姿で表される神鳥であり霊鳥である。ヴィシュヌ神の代替として天界、生命、正義、秩序を現す。ナガ(次々項)より位が上であるので蛇を食べることが許されている。民話では人をも食べる鳥として畏れられている。インドネシア人がヒンドゥー教からイスラム教徒に改宗しても、霊鳥ガルーダは畏怖されるべき厳かな存在としてインドネシア人の潜在意識にプリントされてきた。

ジャワ島にはジャワ熊鷲という鷲の固有種がいる。ジャワ熊鷲は天界から睥睨するがごとく飛行する。冠毛と鋭い眼光の容姿はガルーダの威厳である。国章のガルーダのモデルはジャワ熊鷲といわれる。ジャワの自然林面積の減少に伴い絶滅が懸念されている。

952. ハヌマン/猿神



ハヌマン

インド神話のラーマヤナ(→945)は主人公のラーマ王が攫われた妻シンタ姫を取り戻すため悪魔王ラワナ(前述)と戦うものである。ラーマ王は武人ではあるが流浪の身である。ラワナはラクササの兵を率いる国王である。

そこでラーマ王を助けて悪魔王ラワナと戦うのが猿王スグリーヴァである。猿王スグリーヴァには軍師として神猿ハヌマン(Hanuman)がいた。ハヌマンはジャワ・バリではアノマン(Anoman)とも言われ、インドネシアで人気のある神である。

猿王スグリーヴァはヴァーリンと双子の兄弟であった。ヴァーリンは自分が留守の間に王位についたスグリーヴァに腹を立て、スグリーヴァの妻を奪いスグリーヴァを追放した。追放の身の上のスグリーヴァは、シンタ姫を探索するラーマ王子と出会い、軍師ハヌマンを使い立てて、ヴァーリンとの決闘の助力を求めた。ラーマ王はシンタ姫奪還への協力と引き換えにこれを承知した。

ハヌマンは攫われたシンタ姫を探してランカ(Lanka)島(セイロン島ともいう)に偵察に出かける。魔王ラワナに正体を見抜かれて戦争が始まる。海に兵が渡る堰堤が築かれ、ハヌマンは猿の大軍を指揮してランカ島に攻め入る。何百万という猿とラワナ側のラクササの兵士の戦争である。猿側は投石を武器とし、樹をふりまわして戦う。

最後はラーマ王子とラワナ魔王の大將同士の一騎打ちである。王子の繰り出す強弓に魔王は護符で防御し王子は疲れたかに見えた。その時、ハヌマンはゴングロンガン山を投げてラワナを山の下敷きにしてようやく勝負はついた。シンタ姫を取り戻すことができたが、ラーマ王はハヌマンの行為を怒り、8代末まで生きねばならないという呪詛(じゆそ)をかけた。

バリ島のケチャ・ダンス(→915)の展開はラーマヤナの物語である。ダンスの特徴である舌うちのコーラスは猿の声を演劇化したものである。インド文化圏のインドネシアではインド神話の影響もあって猿は正義の味

方として大事にされている。

ところで猿ならば何でもよいかということではなく、インド神話の猿は顔は黒く毛は白がかって優雅であり尻尾も長い猿である。ハヌマンの子孫の猿の顔が黒いのは悪魔との戦いで火攻めにあい顔が焦げたからである。

ラーマーヤナの物語は東南アジアのみならず中国にも伝えられている。猿の総大将のハヌマンは空を飛び変身もできる猿神である。中国の『西遊記』の“孫悟空”の起源であるといわれる。

日本の昔話に“桃太郎”の話がある。あらすじは犬、猿、雉の家来を連れて海を渡り鬼退治に出かけ、宝物を得て帰るといものであるが、雉をガルダ(前項)に、猿をハマヌンに、宝物を美女シーターに、鬼を魔王ラワナに置き換えるとラーマーヤナの物語である。

桃太郎の話はどのようにして出来たか分からないが、ラーマーヤナの日本版であるというのもむべなるかなである。⇒070.猿いろいろ、176.モンキーフォレスト

953. ナーガとガネーシャ

海外に旅行して飛行機の窓から始めて自然の原野を“蛇行”する川の景色は印象深い。日本の川はコンクリートの堤防の中を細々と出きる限り早く海に達するように真っ直ぐに流れている。これが飼いならされた日本の川である。

インドネシアのジャングルを流れる川は大地をあらん限りのたうち回り蛇の歩みのごとく大きなSの字を繰り返す。彎曲部の端が本流から取り残されて三日月型の池になっているのが一目瞭然である。これが川の本性である。

川がくねり流れる有様は“蛇”を連想させる。ナーガ or ナガ(naga)はインド神話における大蛇である。東南アジアでは土着的な神話と結びつく水の守護神である。クリス(→702)の刃の波型の“くねり”もナーガを象徴している。

ナーガは宇宙の最下層をなす冥界、水界、地下界を代表する。バリの寺院彫刻では土台部分に刻まれる。地下界の守護神として天界のガルダ(前項)と対の関係になる。チャンディ・パナタラン(→142)に蛇堂といわれる堂の側面は大きな蛇で取り囲まれている。

ロロ・キドゥル女神(前述 949)は蛇に乗って南海を移動する。ススフナン王家(→131)では国王に即位の時にロロ・キドゥル女神が訪れ伽を勤めるという伝説がある。その場所に蛇が這い進む道標として白砂が敷かれる。

一方、中国でも蛇の化身である“龍”はめでたい動物とされ天子にもなぞらえられる。東南アジアはインドと中国の二つの巨大文化の狭間になる。一義的にはインド文化の支配下にあるインドネシアやタイにおいても中国文化の影響はある。東南アジアでインドのナーガは中国の“竜”と結合している。

ガネーシャ(Ganesha)は象の頭をしたヒンドゥー教の神様でシヴァ神の息子である。父の一時の怒りでガネーシャは首を切られるが、母の嘆きのためシヴァ神は息子を甦らせるため、最初にそこを通った象の頭をつけた。象の頭の由来である。

ヒンドゥー教では象は富と智恵と愛の神様である。仏教の説話ではマヤ夫人の夢の中に白象が現れ、夫人の脇腹から胎内に入り釈迦が誕生した。従ってタイでは象は神の使いとして大切にされている。仏教では

普賢菩薩は象に乗る慈悲の神様である。タイでは象が道を歩くと車も追い越すことに躊躇^{ちゅうちよ}するので交通渋滞になる。



ガネーシャ 東部ジャワ・カランカテス
2006/10/18 編者撮影

インドネシアにもチャンディ・ボロのガネーシャ神の彫像が見られ、過去におけるガネーシャ信仰を偲ばせる。バリ島にゴア・ガジャ(象の洞窟の意味)という聖地(→264)がある。バリ島で最も古いとされる石窟寺院である。ヒンドゥー教の象の神様のガネーシャの石像がある。ところが実際はバリ島に象が生存したことはない。

今日のインドネシアではガネーシャ信仰はやや希薄感がある。ちなみにジャカルタ国立博物館(→159)の玄関にある象はタイ国王からの贈り物である。バンドン工科大学(→108)にはガネーシャ像があり、同校の校章になっている。

954. バロン/善獣



バリ島の「バロン(Barong)」は獅子、虎、象、雄牛の形をとる善獣である。普通は獅子のもので歯をむき出した威嚇のポーズであるが、顔には愛敬がある。最も一般的な獅子型のバロンは形態のみならず風習まで日本や中国の獅子舞と似ている。バリにおける中国文化の影響を考えざるをえない。バロンの語源はバ(爬=蛇行する)、ロン(竜)とする考察(リー・クーン・チョイ『インドネシアの民俗』)がある。

日本の獅子舞のようにバロンの胴体に人が二人入る。肢体は丁寧に作られた皮細工であり、鏡や宝石がはめられているという工芸品である。

お祭りには村の家々を練り歩く。疫病や災害がやってくれば急遽バロンが登場して厄払いを行う。バロンの霊で邪悪が村に入らないように“おはらい”をする。地域によってはバロン・ランドウンという男女姿の大きな人形のところもある。

バロンとランダ(次項)の争いを主題にして舞踊劇となったものがバリ観光用舞踏のバロン・ダンスである。これは《バロンの表す善》と《ランダの表す悪》との戦いを観光客のためのショーにしたものである。

バトゥブラン(→175)は観光客へのバロン・ダンスのショーが行われる所である。朝9時半から数回の公演である。時間になるとリゾート地のホテルからやってくる観光バスで村の道は大混雑となる。観光客対応の村の仮設舞台のような所である。

バロン・ダンスが行われるのはストーリーらしきものはあるが観光客は気にしていない。それよりはバロンのきらびやかな衣装や時々後ろ足で顔を搔く滑稽な仕草を楽しむ。バロンが歩くと金属の接触する「チャランチャラン…」という賑やかな音がする。観光ショーといえど 80kg もある衣装を被って踊るのは宗教的情熱なしにはありえないであろう。

ハイライトはバロンに味方してランダに闘いを挑む村人が逆にランダによって魔法にかけられてランダにふりかざしたクリス(→702)を自分自身に向ける。その形相はただならぬものである。しかしバロンの魔法が村人

の身を傷つけないように守っている。村人は両者の魔力の支配するトランス状態(→576)にいる。このことからバロン・ダンスはクリス・ダンスともいわれている。

魔女ランダに対抗できる唯一の守護者がバロンである。しかしバロンがいつも善であるとは限らない。時には人間を困らせることがある。一方ではバリ人はバロンのみならずランダにも畏敬をもって扱う。神聖なバロンは大切にしまわれ、村の大事にしか出現しない。観光ショー用のバロンは別途に誂えたものである。

世界の一般常識ではバロンがランダに勝って「目出度し目出度し」である。しかしバリでは悪と善はそれほど単純なものではない。両者の戦いは永遠に続く。バリ人の宇宙観を表す二元論である。

⇒708.バリ人の世界観

955. ランダ/バリの魔女

バリ伝説によれば魔女ランダ(Rangda)の前身はチャロナラン(Calonarang)である。ジャワの王女であるチャロナランはジャワ王家からバリ王に嫁ぐ、しかしバリ王は妃が魔女であることに気がつく。森に追放された王妃はランダとなった。



ランダ

ランダが女である証拠はバロン・ダンスで登場する際に胸にある縞模様の乳房である。あまりにもだらしないぶら下がり方のため注意しないと見逃すほどである。

魔女チャロナランはアイルランガ王(→333)の母である。息子である王はクディリ朝を再興したジャワ王朝史の中でも名君として知られている。魔女として追放されたチャロナランは息子の王国を破滅させようと復讐を企てる。

王は兵を送り対抗するがチャロナランの魔力の前に手も足も出せない。王側の高僧パラダは弟子をしてチャロナランの娘を籠絡して母親の秘密を知る。魔力を封じてチャロナランを滅ぼすが、罪の赦しを与えるのを忘れる。そのため彼女はよみがえり罪を犯しては再び滅ぼされる。これがチャロナラン伝説である。

チャロナランを引き継ぐ者がランダであり、ヒンドゥー教の死の女神であるドゥルガー神の化身といわれ、闇の世界の支配者であり、飢饉や疫病をもたらす。日本では“鬼子母神”として知られるハリティ神がランダに繋がるのであろう。

ランダとは未亡人をも象徴しているらしい。未亡人は死ぬべきものとされ、生きている未亡人は魔女とされた。ヒンドゥー教ではムサティア(mesatia)という未亡人の殉死火葬が知られている。夫の火葬の際に生きている未亡人も一緒に火葬するという風習はバリでも20世紀の始めまで行われていた。

夫を火葬する炎の中へ飛び込む舞台がある。すでに女性はトランス(→576)になっているから恐怖はないという。しかし、もし炎を前にして尻込みすることもありうるかもしれないので女性の身内が突き落とすため介添役として台上に上がるらしい。

ヒンドゥー教徒にとって火葬とは霊魂が肉体を離れる最大の目出度い儀式であり、未亡人の生前火葬にも

残酷という意識はない。ムサティアは必ずしも強制でなくまた身分の高い階級に限られていた。同時火葬に応じた女性には敬意が払われ神のごとく待遇されたい。

未亡人に限らず生前に仕えた召使なども希望者は殉死した。こちらの方は先に死んでおり、後に火葬だけ同時であるが、数十人が殉死したのを西欧人が目撃している。

オランダの植民地政策はバリ島については試行錯誤の結果、文化放任主義を採用せざるをえなかった。しかし未亡人の生前火葬と殉死だけは黙視できなかった。生前火葬禁止はインドにおける英国の植民地政策の踏襲であるが、統治者の威信をかけた厳禁のためこれらの慣習はなくなった。オランダがバリ島で行った多いとは言えない善政の一つかもしれない。